

攻撃性の諸相に関する研究

安 立 奈 步

A Study on Various Aspects of Aggression

ADACHI Naho

I. 問 題

本研究は、心理臨床における攻撃性の捉え方をベースに、攻撃性に関する定義とモデル化を行ない、実証研究へと繋げる試みである。

攻撃性に関する実証研究が比較的盛んに行なわれている社会心理学領域において、攻撃性は、「他者に危害を加えようとする意図的行動（大淵，1993）」と定義される。ここでは、（1）行動であること、（2）意図的であること、（3）背後に敵意や憎しみといったネガティブな感情が働いていること、（4）他者に向けられること、といった内容が、暗黙裡に想定されている。

心理臨床において攻撃性なるものをどう捉え、どう扱うかといったテーマについて検討する際、上記に挙げた4つの論点は非常に重要であるように思われる。従って、まず、各々の論点を手がかりに論じることによって、本研究の視点を明確にしたい。

1-1. 攻撃とは行動か

「“攻撃性”あるいは“攻撃的である”という言葉から、どんなイメージを連想しますか。」

大学生を対象に行なった、自由記述形式による調査（安立，1998）⁽¹⁾からは、“力に任せて乱暴をする”“相手を睨む”“言葉で人にきつくあたる”等の記述が得られた。これらは、人間の行動的側面に関する記述と言えよう。しかし、“何もしないでじっとしているんだけど、怒りや哀しさで心の中がいっぱい”“精神的に余裕のない感じ”“誰かを攻撃することでしか自分を確立できない哀しさ”等、こころのプロセスとして攻撃性を捉えようとする記述も見受けられた。後者の場合、“攻撃性”“攻撃的である”という言葉からイメージされる何らかの状態像を手がかりに、当人の内的状態を推測、あるいは内観して記述したのだろうと推察される。

こういった態度は、心理療法において治療者が、クライアントの呈する状態像から、その内的状態を読み取ろうとする、絶えざる心の働かせ方にも繋がる。例えば、治療者は、“沈黙”の中に、言葉にならない怒りや悲しみを感じ取る場合もあり、“罵倒・批判”の中に、そうとしか表現できない哀しさを感じ取る場合もあり、“過度な明るい振舞い”の中に、怒りや哀しみの感情に直面化することからの回避を読み取る場合もあるだろう。心理臨床において、攻撃性といった場合、行動そのものに着目するよりも、背後にある心理機制との関連で状態像を捉えてゆく、といった心

の働かせ方が、まず必要となってくるのである。

1-2. 攻撃とは意図的か

欲動・情動・衝動の調整と統制は、自我機能 ego function の1つ（小此木，1993）であるが、自我が何らかの要因によって弱まっている場合、欲動・情動・衝動の統制には限界がある。その際の攻撃は、必ずしも意図的になされるとは言えないであろう。

例えば、人格発達のプロセスにおいて自我の弱まる“第2反抗期”と呼ばれる時期がその1つとして挙げられる。思春期には、第二次性徴の出現に伴う内的衝動の突き上げと、社会的要請という外的圧力の両方を受けて相対的に自我が弱まり、自己嫌悪など自我収縮的方向と、自己主張など自我拡張的傾向との間で揺れ動く（北村，1987）。この時期の反抗は、弱まった自我の補強手段であり、自分を作り上げる試みとして重要な攻撃性の発現である、と考えられている。佐野（1998）は、テレクラ遊び・無断外泊など破壊的問題行動を呈した思春期女子の事例を挙げ、子に対する親の共感的対応の重要性と、コミュニケーションの一手段として問題行動を読み取る必要性について考察する。つまり、ここには、破壊的問題行動を呈した本人の意図の次元のみでなく、本人を取り巻く人間との関係性の次元まで拡げて問題を捉えていこうとする視点が、示唆されている。1個人の意図の次元を超え、関係性の次元で攻撃性を捉えていくことは、心理臨床において不可欠な視点である。

1-3. 攻撃の背後には敵対的感情が働いているか

攻撃＝aggression とは、英和辞典では“侵略，侵犯，けんか腰，（不当な）攻撃”の意とされ、堀口（1980）の言うように、本来悪い意味しか持たなかったように思われる。しかし、形容詞の aggressive には、①“侵略的な，けんか腰の，攻勢の（offensive）”の意と、②“積極的な，活動的な（active）”の意があり、「アメリカの文化的背景の下に肯定的な意味を持ち始めたように思われる」と堀口（1980）は述べている。河合（1997）も、攻撃性を「自分ということを前面に出し、それを妨害するものに対しては向かってゆく姿勢」と捉え、そのポジティブな側面に言及している。先の安立（1998）における攻撃性イメージの記述の中にも、“積極的に行動する”“自分の意志を通して突き進んでいく感じ”“力強さ”といったポジティブな意味内容を有する記述が見受けられた。

人間の持つ攻撃性は、外界への適応行動を発動させるもの（Rank, B., 1949）、生命の証（Winicott, D. W., 1977）、「破壊的衝動が…建設的な，積極的感情のかげに隠れてしまえば、その結果はもはや破壊ではなく、…むしろ，建設であり，創造（Menninger, K. A., 1963）」等と述べられているように、人間が生きる上で建設的に働く力でもある。従って、攻撃性を“破壊的な力”としてだけでなく、“能動的な力”として捉えていく視点が必要である。Freud, S. (1996) は、前者を死の本能（タナトス）、後者を生の本能（エロス）とする二大本能論を唱えた。Storr, A. (1974) もまた、攻撃性を、「我々みな非難するような形の攻撃心」と「生き残るためにはどうしても持たざるを得ない攻撃心」とに区別し、後者は、知的努力や克服する力の根源であると述べている。

ただし、心理臨床においては、両者の区別のみならず、先の佐野（1998）の事例のように、“破壊的な力”として発現した攻撃性をどう捉え、受けとめるかが大切になってくる。李（1997）に

よる神経性食思不振症女子の事例を挙げてみる。感情を抑えて淡々と語っていたクライアントが、あるきっかけでセラピストに爆発させた怒りに、李（1997）は、未分化な形での依存欲求の噴出を読み取る。しかし、「親に対する“否定的な感情”を長い間抑圧してきた」クライアントが「“本当の自己”に目覚める」ためには、対決を避けては関係の変容は生じない（李，1997）。すなわち、ここには、怒りや敵対的感情が単独で存在するのではなく、愛情との両価性において働くという視点と、攻撃の発現を治療的に生かすことの必要性とが、示唆されている。

“能動的な力”と“破壊的な力”を相反するものとせず、両者を含みこんだ力そのものに、人間が生きる上での原動力を見ることによって、“破壊的な力”を“能動的な力”へと転換させ治療的に生かす視点が生まれる、と考えられよう。

1-4. 攻撃とは他者に向けられるか

心理臨床において、他者といった場合、必ずしも生身の他者には限らず、内的な対象のあり方が問題とされることが多い。心気症を例に挙げてみよう。心気症とは、①心身の些細な不調に著しくとらわれていること、②その不調に、病的に必要以上にこだわること、③それらを重大な疾患の兆候ではないかと恐れること、④その心配を他者に執拗に訴え続けることを特徴とする（平井，1992）といった症状を特徴とするが、症状形成の根底には、取り入れられた対象に対する恐れ、すなわち自分自身の中にある敵から攻撃され、傷つけられるという恐れが存在する（Klein, M., 1995）。つまり、一見攻撃とは無関係な様相を呈する状態像の背後に、攻撃的衝動が読み取られる場合があるのである。第一にこの点において、攻撃が必ずしも他者に向けられるとは限らない。滝村（1991）は、他者の悪意を知覚し易い傾向（「パラノイド傾向」）として実証研究の中で扱っている。攻撃を他者から受けると体験することは、攻撃欲動に自ら圧倒されてしまわない守りの意味において、1つの能力とも言えよう。Klein, M.によれば、幼児は、死の本能がもたらす、たまらなく苦痛でわからない悪いものが自分の内から自分をバラバラに断片化してしまう破滅—解体不安に晒される。そこで、この攻撃性に満ちた苦痛な自己—部分を分割 splitting し、悪い対象群の中に投影することによって、“破滅—解体不安”は緩和され、対象群からの攻撃という幾分扱いやすい“迫害不安”へと、形を変える（松木，1996）。

一方、自傷行為、摂食障害、アルコール依存などのような自己破壊行為のように、攻撃が他者に向かわず自己に向けられる場合がある。こういった自己破壊行為の病理の背後には、抑うつ感や自責感が中核にあることが多く（松木，1996）、こうしたところの痛みは自己の内界に向けられた攻撃の1つとも捉え得る。第二にこうした点において、攻撃は必ずしも他者に向けられたり他者から被ったりするとは限らないと言えよう。より現実的で安定した対象世界と内的世界を築く作業をクライアントとともに為すことは、心理療法の仕事として非常に重要であり、また長い道のりでもある。Klein, M.によれば、良い自己と対象群を含む内的世界は、悪い自己対象群から分割され隔離された守りの中で豊かになってゆくが、同時に、自己と対象群がそれぞれ統合された全体対象としてまとまってゆく時、分割による守りは困難となる。良い対象群と迫害的な対象群が同一の対象であることへの気づきに伴い、自己のもつ攻撃性への悔い、自責感、罪業感という“抑うつ不安”がもたらされる。この不安に持ちこたえることができれば、より現実的で安定した

内的世界が築かれ、現実吟味力を高める。しかし、不安に持ちこたえられない時、例えば、うつ気分を逆転させた“躁的防衛”によって振り払おうとする。

以上のことから、攻撃には、他者に向けられる場合の他、他者から攻撃されるように体験される場合、自己に内攻したところの痛みとして体験される場合、および、自己破壊行動として発現する場合がある、と言えよう。

2. 攻撃性の定義と状態像の分類

前節では、4つの論点を手がかりに、次のような視点を明確にした。

- (1) 行動そのものに着目するよりも、背後にある心理機制との関連で状態像を捉えてゆく心の働かせ方が必要である。
- (2) 個人の意図の次元を超えた関係性の次元で攻撃性を捉えてゆくことが不可欠である。
- (3) “能動的な力”と“破壊的な力”を相反するものとせず、両者を含みこんだ力を、生きる上での原動力と捉えることにより、“破壊的な力”を“能動的な力”へと転換させ治療的に生かすことができる。
- (4) 攻撃性には、他者に向けられる場合の他に、他者から攻撃を被るように体験される場合、“抑うつ不安”といった自己に内攻したところの痛みとして体験される場合、および、自己破壊行動として発現する場合があると考えられる。

こうした検討を踏まえ、本研究では以下のように攻撃性を定義する。

「攻撃性とは、“能動的な力”と“破壊的な力”の二面性を持つ。前者は、外界への適応行動を発動させ、自尊心の基礎ともなる。後者は、無意識の次元から発せられた衝動・欲動が、内的対象関係の次元で処理されることによって自他に方向づけられる、破壊的な行動および情動・衝動であり、憎しみと愛情欲求といった両価的感情を伴う。“能動的な力”と“破壊的な力”にはそれぞれ多様な形態がある。また、両者は相反するものではなく、両者を包括した力自体に、生きる原動力が存在する。」

攻撃性に関する実証研究には、Buss, A. H., & Durkee, A. (1957), 秦 (1990), 滝村 (1991), 大淵 (1993), 谷口 (1994) によるものがある。しかしいずれも、諸要素が個々に論じられているか⁽²⁾、一部を扱ったものであり⁽³⁾、攻撃性概念を包括的に捉えた研究は見られない。また、人間のもつ二面性に着目した実証研究としては、Jung, C. G. (1970) のタイプ論に立脚し、人格内で相反するものが共存することを明らかにした森 (1983) の研究がある。しかし、二面性を射程に入れた攻撃性に関する実証研究は見られない。従って、本研究の定義に沿って攻撃性の諸相を捕捉する試みには意味があると思われる。

上記の定義に基づき、攻撃性の諸側面について、①攻撃性の向けられる方向性（自己 / 対象）の次元、②表出の有無（表出傾向 / 保持傾向）の次元の2次元から、測定可能な状態像の分類を試みた。攻撃性の持つ二面性のうち、(1)は“能動的な力”に、(2)～(5)は“破壊的な力”に、それぞれ対応する。両者は切り離されたものではなく、相補的な関係にあるものと見なす。

- (1) 能動性：自尊心を持ち外界への適応を発動させる行動。
- (2) 自己攻撃性－表出傾向：自己に向けられる、破壊的で衝動的な行動。
- (3) 自己攻撃性－保持傾向：自己否定感、罪悪感といった自己に向けられる否定的感情。

- (4) 対象攻撃性—表出傾向：他者に向けられる、破壊的で衝動的な行動。
- (5) 対象攻撃性—保持傾向：他者から攻撃される恐れや、他者に対する懐疑的感情。

3. 攻撃性の発動と、他者との距離のとり方との関連について

心理臨床における他者といった場合、生身の他者というよりも、内的対象としての他者のあり方が問題とされることが多いことを、前々節で述べた。そして、攻撃性の発現を、関係性の次元でのメッセージと捉え治療的に生かしていくとする視点について、明確にした。これを踏まえ、前節では、攻撃性の定義を行ない、実証研究として測定可能な状態像の分類を試みた。

では、内的対象との“関係性”という次元に視点を移した場合、他者との交流は主体にとって一体どう体験されているのだろうか。そして、その“関係性”は、前々節で述べてきたような攻撃性と、どのように関連するのであろうか。

臨床場面を訪れるクライアントは、他者との距離感の調節のとりにくさを抱えており、“自分であること”を確かな感覚として得られていないという印象を、筆者は受けている。これは、Storr, A. (1974) による、「人類が直面しなければならない最も困難な問題の1つは、他の人々と十分に親密な接触を保ちながら、一方同時に自律性を保つという問題である」との叙述にも繋がる感覚であろう。Storr, A. が、この対人葛藤の内に攻撃発動の起源があると考えたように、筆者は、他者との距離の調節困難が、攻撃性の表出と制御を困難にしているように感じている。

安立 (1999) は、乳幼児期の分離個体化過程の一段階で他者との距離のとり方が問題となる再接近的葛藤 (Mahler, M. S. 他, 1981) を、「他者との距離感を調節しつつ自己存在感覚を保つ、という相反する二つの試み」と捉え、Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991) を参考に、4因子からなる対人関係質問紙を作成している。前々節で論じたように、攻撃性の発現を、1個人の意図を超えた関係性の次元で捉えることは重要であろう。従って、本研究では、関係性の中でも特に再接近的葛藤に注目し、攻撃性との関連で検討を加えたい。それによって、攻撃性の諸相をより詳細に検討できるのではないかと考える。

II. 目 的

- 1. 本研究の定義に基づき分類された攻撃性の内容に従い、攻撃性質問紙を作成する。
- 2. 攻撃性の諸相について検討する。
- 3. 攻撃性の諸相について、他者との距離のとり方の観点から検討する。

III. 方 法

- (1) 調査対象：近畿地方の私立大学2校の学生；343名（男174名，女169名）。平均年齢19.88歳（SD=1.60）（男20.93歳 SD=1.51，女18.80歳 SD=0.72）。
- (2) 調査時期：1998年10月下旬～11月
- (3) 調査材料
 - a) 攻撃性質問紙；本研究における攻撃性の分類に従い、「能動性」「自己攻撃性—表出傾向」

「自己攻撃性—保持傾向」「対象攻撃性—表出傾向」「対象攻撃性—保持傾向」の5因子を想定した質問紙を、筆者が作成した。項目は、秦(1990)、滝村(1991)、谷口(1994)、YGテストより選出し、必要と見なされる項目については筆者が独自に作成し、表現を統一して用いた。表出傾向については、実際に行動するかどうか問うのではなく、あくまで、欲求や傾向(「～したい」「～な方である」)を問う項目とした。42項目からなる。6件法。

- b) 再接近期の葛藤質問紙：林(1990)による再接近期葛藤を表す用語を用いて、「対象希求」「接近恐怖」の2因子を想定した質問紙を、筆者が作成した。項目は、千原(1992)、安立(1999)より選出し、表現を統一して用いた。30項目からなる。6件法。

(4) 手続き

講義時間に集団で実施した。なお、a)、b) いずれの質問紙も、順序効果をなくすため、被検者間でカウンターバランスした。

IV. 結 果

1. 攻撃性質問紙の検討

42項目からなる攻撃性質問紙について、傾向の低い方から1点～6点を与えて採点した。因子数を5に指定し、因子分析(主因子法, Varimax回転)による因子分析を行なった。各因子に.35以上の因子負荷量を示さない2項目を分析から外し、残り40項目に対し再度因子分析を行ない、因子負荷量.40以上を満たす33項目を攻撃性質問紙として採用した(Table 1)。

攻撃性モデルとの対応性から、第1因子は「対象攻撃性—表出傾向」に、第2因子は「能動性」に、第3因子は「自己攻撃性—保持傾向」に、第4因子は「自己攻撃性—表出傾向」に、第5因子は「対象攻撃性—保持傾向」に、それぞれ相当すると考えられた。因子の中身をより具体的に表すために、各因子に含まれる項目内容を検討し、各因子をそれぞれ以下のように命名した。

第1因子は、“腹の立つ相手にはいやみやとか皮肉を言ってやりたいと思う”“物事がうまくいかないといらいらして、すぐ人にあたる”等の8項目からなり、「対象破壊行動」と命名した。第2因子は、“自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である”“周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通す方である”等の9項目からなり、「積極的行動」と命名した。第3因子は、“他人が不快そうにしていると自分が悪かったのではないかと思う”“何かにつけ心が傷つくことが多い”等の7項目からなり、「自責感」と命名した。第4因子は、“めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある”“自分を傷つけたくなる時がある”等の5項目からなり、「自己破壊行動」と命名した。第5因子は、“他人のことを心から信頼することはできない”“親しみを寄せすぎると人には、警戒してしまう”等の4項目からなり、「猜疑心」と命名した。

各因子得点の上位25%を上位群、下位25%を下位群とし、t検定によるGP分析を行なったところ、全項目、有意差が見られた($p < .01$)。各因子のCronbachの α 係数はそれぞれ、「積極的行動」が.80、「自己破壊行動」が.68、「自責感」が.76、「対象破壊行動」が.75、「猜疑心」が.71であった。

各因子の平均値(括弧内はSD)は、「積極的行動」が34.74(6.70)、「自己破壊行動」が12.97

安立：攻撃性の諸相に関する研究

Table 1 攻撃性尺度の因子分析結果

項目	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	共通性
対象攻撃行動						
腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う。	.642	—	—	—	—	.456
腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である。	.592	—	.257	—	—	.439
自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない。	.577	—	—	—	.235	.408
特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度をとることがある。	.576	—	—	—	—	.395
腹の立つことをされると、にらみつけてやりたいくなる。	.560	—	—	—	—	.354
批判や忠告をされると、内心恨んでしまう。	.538	—	.212	—	—	.360
物事がうまくいかないとイライラして、すぐ人にあたる。	.497	—	.261	—	—	.322
すぐに相手の言葉尻をとらえて、つかかかってやりたいくなる。	.462	—	—	.218	—	.322
積極的行動						
自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である。	—	.737	—	—	—	.580
やりたいと思ったことは行動に移す方である。	—	.729	—	—	—	.560
どちらかと言えば活動的な方である。	—	.696	—	—	—	.522
何事にも恐れず立ち向かっていく方である。	—	.652	-.282	—	—	.535
正しいと思うことは人にかまわず実行する。	—	.633	—	—	.230	.477
いつも何か刺激を求める。	—	.577	—	.299	—	.471
周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通す方である。	—	.537	—	—	.335	.455
平凡に暮らすより何か変わったことがしたい。	—	.513	—	.262	—	.388
色々な世間の活動がしてみたい。	—	.462	.296	—	-.285	.399
自責感						
他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う。	—	—	.705	—	—	.526
何かにつけ、心が傷つくことが多い。	.266	—	.639	—	.256	.551
他人とのトラブルがあると、自分を責める方である。	-.247	—	.621	—	—	.460
不愉快なことでも無理に我慢してしまう。	—	—	.554	—	—	.318
自分はだめな人間だと思う。	—	-.318	.541	.323	—	.519
過去のことを振り返って後悔することが多い。	.295	—	.481	—	—	.370
他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い。	—	—	.451	—	.289	.339
自己破壊行動						
めっちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。	—	.206	—	.622	—	.500
自分を傷つけたくなる時がある。	—	—	.334	.584	.289	.555
無我夢中で乱暴な運転(車、バイク、自転車など)をしたいと思うことがある。	.293	—	—	.566	—	.460
自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある。	—	—	—	.524	.238	.363
自分の皮膚をかきむしりたくなる時がある。	—	—	.236	.457	.343	.391
猜疑心						
他人のことを、心から信頼することはできない。	.225	—	—	—	.661	.504
親しみを寄せすぎた人には、警戒してしまう。	—	—	—	—	.637	.452
人に対して、疑い深いところがある。	.288	—	.291	—	.504	.455
周りの人が敵に見えてしまうことがある。	.340	—	.325	.252	.467	.505
寄与率 (%)	18.60	10.91	6.84	4.42	4.08	
累積寄与率 (%)	18.60	29.50	36.34	0.76	44.84	
α 係数	.75	.80	.76	.68	.71	

因子負荷量は、.200 以下を省略した。

(4.90), 「自責感」が 27.10 (5.84), 「対象破壊行動」が 27.67 (6.22), 「猜疑心」が 12.69 (3.87) であった。

また、性差について検討するために、各因子得点について、男女間で t 検定を行なったところ、「積極的行動」で、男性が女性より有意に得点が高く (p < .01), 「自責感」で、女性が男性より有意に得点が高かった (p < .01)。

2. 再接近期的葛藤質問紙の検討

30項目からなる再接近期的葛藤質問紙について、傾向の低い方から1点～6点を与えて採点した。因子数を2に指定し、因子分析（主因子法、Varimax回転）による因子分析を行なったところ、全項目、.40以上の因子負荷量を満たしていた。2因子にわたって.40以上の因子負荷量を持つ1項目を除外し、残り29項目を再接近期的葛藤性質質問紙として採用した。

想定していた因子との対応性から、第1因子を「接近恐怖」、第2因子を「対象希求」とした。因子得点の上位25%を上位群、下位25%を下位群とし、t検定によるGP分析を行なったところ、全項目、有意差が見られた($p < .01$)。各因子のCronbachの α 係数はそれぞれ、「対象希求」が.91、「接近恐怖」が.88であった。

3. 攻撃性の諸相に及ぼす、他者との距離のとり方の影響

他者との距離のとり方が、攻撃性の諸側面に及ぼす影響について、次のように検討した。

まず再接近期的葛藤質問紙の「対象希求」得点と「接近恐怖」得点について、中央値を基準にそれぞれ高い群と低い群に分けた。そして、攻撃性質問紙の各因子得点について、対象希求(H, L)×接近恐怖(H, L)の2要因分散分析を行なった。その結果を因子毎に記述する。

「積極的行動」因子では、「対象希求」と「接近恐怖」の交互作用が有意であった($F [1,339] = 3.89 p < .05$)。「対象希求」の単純主効果は、「接近恐怖」H群では差がなかったが、「接近恐怖」L群では、「対象希求」H群の得点がL群の得点よりも有意に低い傾向にあった($F [1,169] = 3.90 p < .10$)。また、「接近恐怖」の単純主効果は、「対象希求」H群では差がなかったが、「対象希求」L群では、「接近恐怖」H群の得点がL群の得点よりも有意に低くなっていた($F [1,169] = 12.73 p < .01$)。

他の4因子については全て、2つの対人距離のとり方いずれも、主効果のみ有意であった。すなわち、「自己破壊行動」得点では、主効果が有意であった（「対象希求」 $F [1,339] = 20.83 p < .01$ ；「接近恐怖」 $F [1,339] = 47.55 p < .01$ ）。「自責感」得点では、主効果が有意であった（「対象希求」 $F [1,339] = 58.87 p < .01$ ；「接近恐怖」 $F [1,339] = 36.57 p < .01$ ）。「対象破壊行動」得点では、主効果が有意であった（「対象希求」 $F [1,339] = 19.06 p < .01$ ；「接近恐怖」 $F [1,339] = 18.68 p < .01$ ）。「疑猜心」得点では、主効果が有意であった（「対象希求」 $F [1,339] = 10.08 p < .01$ ；「接近恐怖」 $F [1,339] = 117.09 p < .01$ ）。

V. 考察および今後の課題

1. 攻撃性の諸相について

攻撃性質問紙の因子分析により得られた5因子は、本研究における定義に基づいて構造化された攻撃性モデルに、ほぼ準ずるものであった。この結果から、多層的で包括的な状態像としての攻撃性の諸相を掴むことができた。しかし、因子分析結果を検討すると、2つの点で、モデル化の段階とはやや異なる結果が得られた。従って、この結果の意味するところは何かをめぐって、考察を進めたい。

1点目は、モデル化の段階の想定と異なる因子としてまとまりを構成した項目群が見られたこ

とである。「対象攻撃性－表出傾向」（「対象破壊行動」因子）に分類された8項目のうち、3項目（「腹の立つことをされると、後々まで根に持つ方である」「自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない」「批判や忠告をされると、内心恨んでしまう」）は、モデル化の段階では、「対象攻撃性－表出傾向」でなく「対象攻撃性－保持傾向」への分類を想定していた項目群であった。しかし、「対象攻撃性－保持傾向」（「猜疑心」因子）としてはまとまらなかった。これは何を意味するのか。本研究で扱った「対象攻撃性－保持傾向」の質的課題に立ち返って考察を試みたい。本研究で扱った「対象攻撃性－保持傾向」とは、他者から攻撃を被る迫害的な恐怖であり、因子分析の結果まとまった4項目（「猜疑心」因子）はすべて、他者に対する迫害的な恐怖や警戒心、不信感が強い内容であった。一方、「猜疑心」因子としてまとまりを持たなかった上記3項目の内容は、迫害的な恐怖の次元にまでは達していない。従って、両者の内容を比較すると、体験のリアリティが異なっていたと思われる。

「対象攻撃性－保持傾向」は単次元ではない。「攻撃を表出しない」と一口に言っても、(1)衝動を意識化してはいるが表出しない、といった比較的健康な次元から、(2)衝動が一見攻撃とは無関係な別の行為⁽⁴⁾として表出される次元、そして本研究で扱ったような、(3)衝動を自分の内にあると意識化できず迫害的恐怖として体験する次元とに、区別されるであろう。「猜疑心」因子から外れた上記の3項目は、意識化が可能で比較的健康な(1)の次元にあたる内容であると思われる。3項目が吸収された「対象攻撃性－表出傾向」（「対象破壊行動」因子）にも眼を向けてみよう。本研究では、一般青年が調査の対象であり、「対象破壊行動」因子について問う際、実際に攻撃行動をするかどうかでなく、あくまで行動の欲求や傾向について問う方法論を採用している。これらを総合して考えると、「行動表出の衝動を意識化する」と「衝動を意識化しても行動表出しない」ことは、自我の働きとしては同一次元であるために、3項目は「対象破壊行動」因子に吸収され、同一因子としてまとまりを構成したと見られる。これは、表出の有無（表出傾向／保持傾向）の次元の分類では捉えきれなかった領域であると同時に、「対象攻撃性」をめぐるこの世界の奥深さに繋がるとも考えられ、今後の検討が望まれるところである。

2点目は、「自己破壊行動」因子が、因子としてのまとまりを持ったものの、 α 係数が.68と、内的一貫性がやや低かったことである。因子分析の結果を再度検討してみると、「自責感」「対象攻撃行動」「猜疑心」のいずれかの因子に.35以上の因子負荷量を示したために除外された項目がいくつか見られた。この結果は何を意味するのであろうか。まず、柏木（1988）が自傷行為の動機として、1）抑うつ気分からの解放的要因、2）自己陶酔的要因、3）他者操作的要因を挙げているように、自己破壊行為に至るにはいくつかの動機が考えられ得ることが、因子の内的一貫性を低くした要因ではないか、と推測される。Kafka, J. S. (1969)による自傷行為の事例報告によれば、患者には、「生き生きしてくる」という快感や、血液が体表を流れる時の官能的感覚があると言い、血液は内在化された母親であり、移行対象（Winnicott, D. W., 1979）に相当する、と解釈されている。つまり、破壊行為が自己に向けられた場合であっても、行為の主体にとっては、内在化された他者との一体感を体験する意味を持つ場合も、考えられるのである。

一般青年を対象としているために、先に考察した「対象攻撃性」同様、「行動表出の衝動を意識化する」と「衝動を意識化しても行動表出しない」ことをめぐる自我機能のあり方も、結果に影響していると思われる。つまり、一般青年では、たとえ破壊衝動を持っていたとしても、実

際に行動に出てしまうのではなく、こころのプロセスとして処理してゆけるだけの自我の強さを持っている。自我機能の持つこの強さと柔軟さが、「自己破壊行動」因子の内的一貫性を逆に低める方向で影響したのではないかと推測される。

さて、性差については、「積極的行動」は男性の方が高く、「自責感」は女性の方が高い、という結果が得られている。このことから、内的なエネルギーが、男性では活動性として発動される傾向にあり、女性では外界への発動が躊躇われ自己へと内攻する傾向にあると言えよう。ただし、本稿では記載していないが、男女別の因子分析では、男女では異なる因子構造を持つことが明らかになっている。性差の問題は、攻撃性の諸相を検討する上で不可欠であるが、紙面の都合上、稿を改めて検討することにしたい。

2. 他者との距離のとり方の観点からみた、攻撃性の諸相について

攻撃性質問紙の各因子得点について、「対象希求」(H,L) × 「接近恐怖」(H,L) の2要因分散分析を行なった結果、「積極的行動」得点のみ、2つの他者との距離のとり方の、交互作用が見られた。すなわち、強い「対象希求」を持つ場合、「接近恐怖」の高低に拘わらず、「積極的行動」は低くなっていたのに対し、「対象希求」をあまり持たない場合、「接近恐怖」が高い者の方が、低い者よりも「積極的行動」は低く、全体として、「対象希求」「接近恐怖」どちらもあまり持たない者においてのみ、「積極的行動」が高くなっていた。この結果から、次のようなことが言えるのではないかと。

まず、対象希求が強い場合、対象にしがみついていなければ不安で、そのために、個として安定した自尊心をもって行動できないのではないかと考えられる。例えば、神経性食思不振症のクライアントの示す過活動は、“躁的防衛”によるものである。他者と「心理的に分離して自分独自の人並みな世界を持つことは、対象から孤立した無能で卑小な自分を感じることに過ぎない（松木, 1996）」と体験されるために、「抜きん出てやせ」て「明るく活動的でなんでもやれる万能的な自分」にしがみつこうとしている。こういった活動性は、本来の欲求から出た“能動的な力”であるとは言えないであろう。

一方、たとえ対象希求をあまり持たなくても、接近恐怖のある場合には、能動的な力の発動が妨げられていた。能動的なあり方は、外界との接触の中で成り立つ場合も多い。そのため、対象からひきこもってしまう傾向にあると、発動の場を逃してしまうのではないかと考えられる。しかし、他者との関わりを避ける、という同一の状態像であっても、例えば、関わりに対して不安を意識化している場合と、意識化していない場合とでは、能動性のあり方に、違いが見られるであろう。本研究で測定されたのは、前者の場合であったと考えられる。例えば、安立（1998）において、“自己中心的”“他者の排除っていう感じ”といった状態像の記述として見られたように、たとえ他者との関わりを避けていても、自分の道を突き進むことのできる場合も、想定され得る。他者との関わりに対する不安を特に意識化していなければ、能動性を減じることなく、自分の道を進むことができるとも考えられよう。ただし、それがその人本来の欲求から発動された“能動的な力”であるとは、一概に言えないであろう。

「積極的行動」が他者との距離のとり方に影響を受ける、という上記の結果からは、関係性の次元を大切に扱ってゆくことによって、その人の本来持っている能動的な力の発動を見出すことのできる可能性が、示唆されていると思われる。能動性の中身は各人多様である。Winnicott, D. W.

(1979) が述べているように、個人が心理的に単一体となるためには、「私は行なう」よりもまず「私は存在する」が先行しなくてはならず、まず個人がその人として「存在する」感覚が持てることが大切である。しかし、本研究で測定された「積極的行動」因子の内容は、主に積極性や行動的側面が中心であり、「能動性」について、多面的に充分捉えることができなかった。従って、今後、「積極的行動」因子としての側面だけでなく、より分化した、より詳細な、能動性の中身の検討が望まれる。質問紙で捉え得る範囲には限界があり、投影法による検討も加えていく必要もあるだろう。ただし、質問紙・投影法といった手法はあくまで人間を知る手がかりである。心理臨床においては、「能動性」の含意するところの多面性をセラピストが自覚し、その人の持つポジティブな側面に眼を向ける姿勢が最も大切であろうと思われる。「私は存在する」「私は行なう」が、その人に必要な過程を経て獲得され、その人本来の能動性が発動されていけばよいのである。この観点から見ると、攻撃性質問紙を構成する5因子のうち、「積極的行動」因子のみに“関係性”の交互作用が見られたという本研究の結果は、“関係性の中に投入された個人が、真に個として存在し、行動する”ことの奥深さと困難さを示唆しているようにも思われ、非常に興味深い。

「積極的行動」因子で、「対象希求」「接近恐怖」いずれもあまり強くない場合のみ能動性が高い、という上記の結果に対し、「積極的行動」因子以外の4因子は、「対象希求」「接近恐怖」の主効果のみ有意であった。すなわち、「自己破壊行動」、「自責感」、「対象破壊行動」、「猜疑心」のいずれも、「対象希求」「接近恐怖」どちらかの葛藤をあまり持たなければ、攻撃が破壊的な方向へ発現することは減じられていた。このことは、関係性の次元を大切に扱ってゆくことによって、衝動が破壊的な方向へ向かうのを静めることができる可能性を示唆していると思われる。更に、“破壊的な力”と“能動的な力”が相反するものでなく相補的な関係にあるという筆者の視点から見れば、その人が本来持っている“能動的な力”へと転換してゆける可能性も示唆していると考えられよう。ある1つの状態像をとっても、状況に即した適切な表出であれば有効に機能するし、文脈から外れた表出であれば破壊的に機能してしまう。このように、同じ状態像であっても、文脈によって機能の仕方は変わってくる。堀口(1980)が、文脈を逃した攻撃的衝動について、「蒸し返す訳にもいかず、対人関係の中での処理の可能性を失ってしまう」と述べるように、適切な文脈における適切な攻撃的衝動の表出は大切である。しかし、自己感情を意識化し適切な文脈での適切な処理が困難である場合、あるいは外傷体験がこころの傷となっている場合、衝動はゆき場を失い、「自責感」に苦しんだり「猜疑心」を抱いたり「自己破壊行動」に至ったりし、生きることに困難をきたす状態すら生じる。心理療法は、ゆき場を失った衝動を扱うための時間と場所を提供し、クライアントのペースで、その人の抱く内的対象との“関係性”を扱い、安定した自己-対象世界を築こうとする中で、本来持っている能動性の発動を模索してゆく過程とも言うことができる。

心理臨床の分野では、調査研究と事例研究による検討が、バランスを保ちながら進められる必要性があると筆者は感じている。従って、本研究において、定義、構造化された攻撃性モデルは、心理療法の実践と切り離されたものではなく、実践に繋がる1つの理論的枠組みである、と筆者は捉えている。調査研究から得られた結果と、心理療法の実践から得られた素材とのズレから、学ぶところも大きいと感じる。本研究において“破壊的な力”として扱われた、「自己破壊行動」「自責感」「対象破壊行動」「猜疑心」の4因子は、対人距離のとり方の影響が一樣であったために、

個々の状態像の詳細な検討が充分に出来なかった。しかし、心理療法の実践から言えば、とても一様の影響とは言えぬ感触を、筆者は抱いている。このようなズレを手がかりとして、今後、次のような研究に発展させたいと考える。すなわち、事例研究においては、各人の本来持つ“破壊性”“能動性”両面を含み込んだ“力”に目を向け、その力が“関係性”の中でどう阻まれ、“関係性”の中でどう発動させてゆけるか、検討していくことが課題となるであろう。一方、調査研究においては、本研究で得られた攻撃性質問紙の因子構造を基に、被検者をいくつかのタイプに類型化し、より力動的な視点から攻撃性の諸相の特徴について、検討していくことが課題となるであろう。また、本研究で扱った“関係性”とは、再接近期的葛藤という二者関係的なあり方に焦点づけていた。そのため、三者関係的なあり方、あるいは、葛藤に対処し関係性を変容させていこうとする主体的なあり方については、扱ってこなかった。従って、今後は、より多面的な“関係性”の視点を踏まえて、検討を加えていく必要があると思われる。

註

- 1) 安立(1998)は、攻撃性質問紙の作成にあたり、以下の3点について、自由記述形式で問う予備調査を実施している。(1)“攻撃性”“攻撃的である”という言葉から、どんなイメージを連想するか。(2)状況等も含め、他者が攻撃的であるとはどんな状態だと思うか。(3)状況等も含め、自分自身が攻撃的であるとはどういう状態と思うか。
- 2) Buss, A. H., & Durkee, A. (1957)は、攻撃性には多様な表現様式があると述べ、臨床的経験に基づいて、8つの下位分類(「暴力」「間接的攻撃」「いらだち」「反抗」「恨み」「疑惑」「言語的攻撃」「罪悪感」)による質問紙を作成している。ここでは、攻撃性の諸相が詳細に捉えられているものの、攻撃性概念を定義、モデル化した上で、包括的に論じられているとは言えない。Buss, A. H., & Durkee, A. (1957)を受け、秦(1990)は、敵意的攻撃性質問紙を作成している。しかし、質問紙作成にあたって、表出されない対象攻撃性を表す重要な項目群であると考えられる「疑惑」が除かれており、削除の根拠も述べられていない。そのため、攻撃性概念をどう捉え、個々の状態像をどう見るか、といった視点が不明確であるように思われる。
- 3) 攻撃性のうちの一部を扱った研究としては、滝村(1991)、谷口(1994)のものが挙げられよう。滝村(1991)は、パラノイド質問紙を作成し、一般高校生と少年院入所者に実施して、後者の被検者群における高いパラノイド傾向を明らかにした。谷口(1994)は、青年期女子を対象に、自己破壊行動と対象(母親)攻撃行動に関し、「～したい」といった願望を表す表現に統一した質問紙を作成し、自己攻撃性と対象攻撃性ととの攻撃性の間に、有意な相関を見出している。
- 4) 例えば、“受動攻撃性人格障害(拒絶性人格障害)(DSM-IV, 付録B, 1996)”に見られる行動特徴のうち、次のような行動パターンがこれにあたると思われる。「日常的な社会的および職業的課題を達成することに受動的に抵抗すること。この抵抗は、優柔不断、物忘れっぽさ、頑固さ、意図的な効率性の低下の形で表わされ、例えば、「分担された仕事をしないことで他の人の努力のじゃまをする」がその一例である。

文 献

- 安立奈歩(1998): 攻撃性の体験様式と、自己調節のあり方について。京都大学大学院教育学研究科修士論文。(未公開)
- 安立奈歩(1999): 青年期の境界例心性に関する研究。心理臨床学研究, 17(4), 354-365.
- American Psychiatric Association (高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸訳)(1996): DSM-IV精神疾患の診断・統計マニュアル。医学書院。
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991): Attachment styles among young adults: Test of a

- four-category model. *Journal of Personal and Social Psychology*, 61, 226-244.
- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957): An Inventory for Assessing Different Kinds Hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21 (4), 343-349.
- Freud, S. (竹田青嗣編・中村元訳) (1995): 自我論集. ちくま学芸文庫.
- 秦 一士 (1990): 敵意的攻撃性インベントリーの作成. *心理学研究*, 61 (4), 227-234.
- 林 直樹 (1990): 境界例の精神病理と精神療法. 金剛出版.
- 平井孝男 (1992): 心気症. *心理臨床大事典*. 培風館.
- 堀口美津子 (1980): 青年期女子における攻撃性の認知と TAT との関係. *京都大学学生懇話室紀要*, 10, 82-91.
- Jung, C. G. (高橋義孝訳) (1970): 人間のタイプ. 日本教文社.
- Kafka, J. S. (1969): The body as transitional object a psychoanalytic study of a self-mutilating patient. *British Journal of Medical Psychology*, 42, 207-212.
- 柏木 勉 (1988): Wrist Cutting Syndrome のイメージ論的考察—23 症例の動機を構成する 3 要因の検討—. *精神神経学雑誌*, 90 (6), 469-496.
- 河合隼雄 (1997): 子どもと悪. 岩波書店.
- 北村陽英 (1987): 反抗と逸脱 親離れの挫折. 馬場謙一他編. 青年期の深層 日本人の深層分析 10. 有斐閣, 57-82.
- Klein, M. (小此木啓吾・岩崎徹也責任編訳) (1996): 羨望と感謝. 岩崎学術出版社.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳) (1981): 乳幼児の心理的誕生—母子共生と個体化. 黎明書房.
- 松木邦裕 (1996): 対象関係論を学ぶ クライン派精神分析入門. 岩崎学術出版社.
- Menninger, K. A. (草野栄三良訳) (1963): おのれに背くもの (上). 日本教文社.
- 森 知子 (1983): 質問紙による人格の二面性測定の試み. *心理学研究*, 54 (3), 182-188.
- 小此木啓吾 (1993): 自我. *精神医学事典*. 弘文堂.
- 大淵憲一 (1993): 人を傷つける心—攻撃性の社会心理学. サイエンス社.
- Rank, B. (1949): Aggression. *The Psychoanalytic Study of the Child*, 3/4, 43-48.
- 李 敏子 (1997): 心理療法における言葉と身体. ミネルヴァ書房.
- 佐野直哉 (1998): 反抗の心理と病理—“愛”か“憎しみ”か—. *児童心理*, 690, 1-10.
- Storr, A. (高橋哲郎訳) (1974): 人間の攻撃心. 晶文社.
- 滝村美保子 (1991): パラノイド傾向と攻撃行動. *応用社会学研究 (東京国際大学社会学研究科)*, 1, 61-78.
- 谷口奈青理 (1994): 青年期女子における自己破壊傾向と母子関係について. *京都大学教育学部紀要*, 40, 277-288.
- 千原雅代 (1992): 女性の同一性について—測定論的な見地から—. *京都大学教育学部紀要*, 38, 289-299.
- Winnicott, D. W. (牛島定信訳) (1977): 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社.
- Winnicott, D. W. (橋本雅雄訳) (1979): 遊ぶことと現実. 岩崎学術出版社.

(博士後期課程 2 回生, 心理臨床学講座)